

# 英語教育における学習意欲を高める授業実践の展開

ー ICTの活用やALTとのチーム・ティーチングを通して ー

学籍番号 219308

氏名 田中 未来

主指導教員 池嶋 伸晃

副指導教員 橋本 健一

## 1. 背景 と目的

国における GIGA スクール構想により、小・中学校では、1人1台の ICT 端末が整備され、さまざまな場面において活用が行われるようになった。中学校学習指導要領解説(平成 29 年告示)外国語編(文部科学省 2017)では、ICT の活用について、「生徒が身に付けるべき資質・能力や生徒の実態、教材の内容などに応じて視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること。」と記載しており、積極的 ICT の活用が求められている。

実習校においては、ICT を活用した授業を見学する中で、JTE と ALT の TT の在り方について、ALT の役割が発音モデルの提示がほとんどであり、ALT と生徒がコミュニケーションをとる機会が少ないことに疑問を抱いた。文部科学省は ALT の役割について、生徒がネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などとのコミュニケーションを通して、「標準的な英語音声に接し、正確な発音を習得したり、英語で情報や自分の考えを述べたりするとともに、相手の発話を聞いて理解するための機会が日常的に確保されることが重要である。そうした人材としては、ALT のほかに、地域に住む外国人、外国からの訪問者や留学生、外国生活の経験者、海外の事情に詳しい人など幅広い人々が考えられこれらの人々の協力を得ることが、『生徒が英語に触れる機会を充実』し、『授業を実際のコミュニケーションの場面とする』ことに資する。」と記載しており、ALT は英語の授業における JTE の重要な「パートナー」として協働することが求められている。

そこで本研究では、ICT を使った授業や ALT との TT の授業観察や授業実践、アンケート調査を通して、生徒の学習意欲、学力を高める授業について検討し、提案することを目的とする。

## 2. 実践研究

### 2.1 方法

本研究は、まず先行研究を整理・分析し、ICT を活用した授業や ALT との TT の在り方についての理論的な枠組みを明らかにした。次に、基本学校実習において英語の授業や他教科の授業の観察、先生方に対して ICT に関する聞き取り調査を通して、実習校の実態や課題について

考察した。さらに発展課題実習において ICT を用いた授業や ALT との TT の実践、アンケート調査などを行い、生徒の学習意欲を高める授業について分析した。

## 2.2 結果

授業では、第 1 に、ICT に振りまわされないよう、授業で必要か否かを吟味し、効率よく活用すること。第 2 に授業で ALT との TT を行う際は、JTE と ALT、生徒と ALT が会話をする機会を多く設けること。以上の 2 点に配慮し実践を行った。これら踏まえ、発展課題実習 II において研究授業を行った。授業後に実施した英語学習に関するアンケート調査からわかったことを、以下 3 点述べる。

まず、スクリーンを活用した授業は生徒の理解の一助となっていることである。スクリーンを使うことによって従来では不可能であったさまざまなことが可能になる。聴覚に障がいを持った生徒を含めた多くの生徒がスクリーンの活用について肯定的な回答をしており、スクリーンを使うことが視覚的に情報を獲得しやすい環境を作り出していることが考えられる。

次に、生徒は英語の授業でもタブレット端末をもっと使いたいと思っていることである。実習校における英語の授業では、ほとんどタブレット端末が使われていない。アンケート結果から、英語の授業でもタブレット端末を積極的に使っていくことで、生徒の学習意欲の向上、結果的には学力の向上につながることを推察される。

最後に JTE と ALT の TT では、ALT と JTE 間での会話や ALT と生徒間での会話の機会を増やすことによって、生徒の学習への意欲や英語力の向上が期待できることである。アンケート結果において ALT ともっと話したいという生徒が多かったことから、英語によるコミュニケーションを行いたいという学習意欲が高いということがわかる。もっと話すためには、前提として英語を話しやすい環境の構築が必要であるため、まずは JTE が授業内外問わず率先して声をかけることが大切である。

## 3. 今後の課題

本研究での反省は、学習用タブレット端末を 1 人 1 台使った授業を行わなかった点である。タブレット端末を活用した個別・協働学習に焦点を当てた授業を立案し、実践する必要があったと考える。今後は、さまざまな ICT 活用事例を参考にしながら、必要に応じて実践していくことを心がけたい。竹内(2012)は、8 つの指針の中で「機器は消耗品と考え、どんどん使う」べきであることを述べている。機械にも寿命があるため月日が経てば、当然劣化してくる。学校の ICT 環境が整っているならば、授業の質を高めるためにも最大限に活用していくことが今後の課題である。最後に、生徒の学習意欲を高めることは決して容易なことではない。しかし、生徒一人一人が社会で活躍するためには、たくましく生き抜くための資質・能力が必要である。生徒が主体的に学習に取り組むために、教師は絶えず授業改善に努めなければならない。英語教育においては、英語やその背景にある文化を学ぶことの楽しさを 1 人でも多くの生徒に理解してもらえよう、授業では工夫した ICT の活用や ALT との TT を取り入れるなど、学習過程の改善・充実を図っていく必要がある。本研究では、ICT の活用や ALT との TT を取り入れた学習意欲を高める授業について考察した。今後は、「学習意欲を高める授業」と「学力を高める授業」の相関関係について検討していきたい。